

【報 告】

第2回 タイ・スタディツアー報告

鈴木ゼミナール・加藤ゼミナール
(文責：鈴木佑記)

目 次

- 1 スタディツアー実施の趣旨
- 2 チェンマイに関する情報
- 3 スタディツアー実施概要
- 4 学生による「振り返り(気づき)」まとめ

1 スタディツアー実施の趣旨

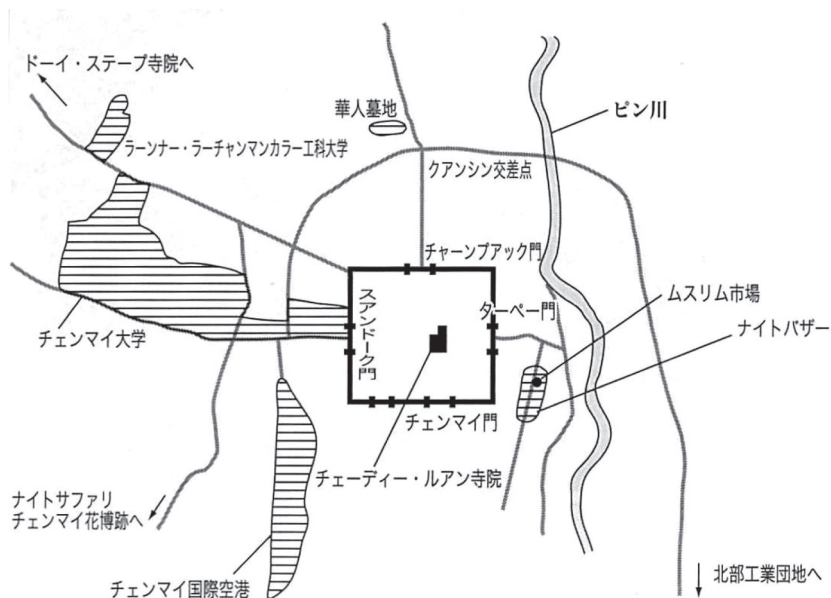
2019年度も昨年度と同様、鈴木ゼミナール(政治行政学科)と加藤ゼミナール(経済学科)合同によるスタディツアーを実施した。場所も同じくタイのチェンマイである。2018年度のスタディツアーでは、「少数民族」が最重要のキーワードとなっていたが、今年度はそれに「文化の比較」を新たに加えた。

たとえば「文化」の中でも学生たちが特に関心を払う食文化を例に挙げると、日本とタイはどちらもコメを主食としているが、種類はジャポニカ米とインディカ米とで異なる。コメの種類が異なるだけで、料理や調理方法、そして食べ方や食べる場所などにも違いがみられる。また宗教面に目を移しても、日本とタイはどちらも仏教国ではあるが、それぞれ大乘仏教と上座仏教を主に信仰する点で異なる。そのため、信徒が守るべき戒律のあり方、在家者の生活、寺院の構造、信仰形態などにいたるまで大きな違いがみられる。そのような類似点と相違点を学生自らが見つけ出せるような、スタディツアーを企画した。もちろん、キーワードの一つとして挙げた「文化の比較」は、国士舘大学が開設している講義科目においてもある程度学ぶことができる(例えば引率教員の

鈴木が担当している「異文化の理解」など)。しかし、現地へ実際に足を運び、その土地で暮らす人々と対面的な交流をすることでのみ体感できる「文化」もあるはずである。

本スタディツアーにより、本学学生がタイへ赴き現地の人々と交流するなかで、日本の文化との共通点と相違点を自ら発見する機会を提供できると考えた。また、単なる文化の比較だけにとどまらず、本学学生が海外に身を置くことで、自分たちが住む日本のことを学ぶ（あるいは知らないということに気づく）ことにもつながる。参加学生が日本とタイの類似点と相違点を現場で体感しながら学ぶことを目的に据え、スタディツアーは行われた。なお本スタディツアーは、国士舘大学国際大学交流セミナーの支援制度を利用して実施したことを明記し、ここに謝意を示す。

2 チェンマイに関する情報



出典：綾部真雄編、2014『第2版 タイを知るための72章』明石書店、337頁。

「北方のバラ」とも称されるチェンマイ県は、タイの首都バンコクの北方693キロメートルに位置する。タイ北部を代表する都市であり、人口も面積も北部で最大である。タイ第2の都市といわれるが、人口は約164万人（2017年）であり（77都県中第5位）、バンコク都の人口約568万人（2017年）に遠く及ばない。

チェンマイとはタイ語で「新しい城壁都市」を意味する。「都市」の歴史はマンラーイ王がピン川沿いに建設した1296年にまで遡ることができる。彼はチェンマイを拠点として版図を広げてラーンナー王国（1292年～1775年）を築いた人物として有名である。1558年にビルマ（現ミャンマー）に敗北後は約200年間（1796年まで）、チェンマイ地域はビルマ勢力の支配下に置かれた。現タイ王朝（ラッタナーコーシン王朝）に完全に統合されたのは、1894年のことである。

上記地図上で城壁（黒線）に囲まれた部分が旧市街地である。その中央東寄りに朽ちかけた大仏塔を擁するチェーディー・ルアン寺院があり、この境内に置かれたラック・ムアン（国柱）がチェンマイの象徴的中心にあたる。城壁とピン川の一帯がチェンマイきっての観光エリアである。我われの宿泊先も同エリアのナイトバザール地区南方に位置する。

旧市街を中心に14世紀から16世紀にかけて建てられた寺院が数多く残っている。チェンマイで最も有名な寺院とされるのが、標高1670メートルのドーイ・ステープの中腹に位置するワット・ドーイ・ステープである。タイ北部で最も神聖な寺院とされており、本スタディツアーにおいても、タイ人学生とともに参拝した。

3 スタディツアー実施概要

2019年8月16日（金）から21日（水）にかけて6日間、タイ王国にあるチェンマイを訪問し、スタディツアーを実施した。

8月16日は羽田空港からバンコク経由にてチェンマイに移動した。ホテル

第2回 タイ・スタディツアー報告

到着後、ナイトバザールのアヌサーン市場に出かけ、夕食をとった。その際、参加メンバーと本セミナーの目的と内容について確認した。

8月17日はメーヤーショッピングセンターまでソントウ（乗り合いバス）にて移動した。そこのフードコートでチェンマイ名物カオソーイなどを食した後、チェンマイ国立博物館へ移動した。そこで、タイの仏教について、また仏像を中心とする遺物からチェンマイの歴史について学んだ。夕方からウアラーイ通りに移動して、週に一度開かれるサタデーナイトマーケットを散策し、夕食をとった。

8月18日はタイ人大学生と共にドーイ・ステープを中心とする山中をめぐり、タイの少数民族とタイ仏教について学んだ。まず、タイ人大学生と合流後、一緒に昼食をとった。班にわかれ、自己紹介をして共食することで一体感を高めていった。



写真1 昼食の様子

タイ人大学生と共に最初に訪問したのは、ドーイ・ステープの山奥に位置するモン族の村落である。かつてモン族はケシ栽培する違法者として有名であったが、現在はコーヒーやイチゴなどの換金作物を育てて生活している実態について学んだ。また観光客相手の商売として、民族衣装などが商品化されている実情を観察した。夕方にホテルに戻った後、サンデーナイトマーケットを散策し、その日に起きた出来事を全員で共有し、振り返り作業を実施した。

8月19日はチェンマイ大学に訪問した。学生食堂で食事をした後、山岳民族博物館と山岳民族観光村落（Baan Tong Luang Eco-Agricultural Village）に訪問し、主にカレン、モン、アカについての情報を収集した。



写真2 山岳民族博物館で熱心にメモを取る学生たち

第2回 タイ・スタディツアー報告

まず、山岳民族博物館に展示している資料でタイ山地民に関する基礎知識を身につけた。その後、実際に山地民が暮らす村落を訪れたことで、参加学生がタイの少数民族の置かれている状況を深く理解できたことが、後掲する「4 学生による「振り返り（気づき）」まとめ」の内容からもわかる。夜はタイ人大学生と合流し、一緒に夕食を食べて交流を深めた。

8月20日はチェンマイ旧市街地を探索した。そうすることで、13世紀にチェンマイを拠点として繁栄したランナー王国の歴史だけでなく、仏教寺院が数多くある古都としての町の特徴について学んだ。教員が事前に提示した課題について、学生は協力しながら解決に向けて取り組んだ。たとえば、町中にあるモン族市場を探したり、雲南から影響を受けた食文化について調べたりした。

8月21日はチェンマイからバンコクを經由して日本に帰国した。



写真3 タイ人大学生との記念写真（ワット・ドーイ・ステープ）



写真4 タイ人大学生に参拝の仕方を教わる参加学生たち

4 学生による「振り返り（気づき）」まとめ

本スタディツアーではチェンマイでの滞在期間中、每晚その日の活動内容を振り返る作業を実施した。単にその日に起きた出来事を回想するだけでなく、学生それぞれが考えたこと、感じたこと、反省点などを共有することで、次の日の活動に活かせるような思考の掘り下げを行った。ここでは、日々の振り返り作業にあたって記録したシート内容は省略する（ただし、毎日の記録に関連づけて最後の記録シートを提出した岡部さんを例外とする。）。その代わり、全行程を終えてから学生が提出した、設問付き振り返りシートの内容を紹介することにしたい。そうすることで、参加学生が本スタディツアーでどのような経験をしたのか、またどのように感じたのかが生き活きと伝わるはずである。基

本的には、学生による文面を掲載しているが、そのままでは意味不明な場合や内容が伝わりにくいなどの場合に限り、若干の加筆修正を行ったことを断っておく。

設問1

スタディツアー期間中の印象深い出来事を三つ挙げてください。何が起こりましたか？それに対して自分はそれにどのように反応しましたか？他の人たちはどのように反応していましたか（していたように見えますか）？もう一度同じような事が起きたら、どのような行動を取りたいですか？

井川達貴

1-1. 天候について

チェンマイの気候は、日本の気候に比べて個人的に過ごしやすく感じた。具体的に述べると、チェンマイは日本に比べると若干気温が低く湿気が少ないため、日本特有のジメジメした暑さは感じられず、むしろ涼しく感じた時もあった。

だが、スタディツアー期間のタイは雨期であったので、1日に1回ほどはスコールという日本でいうゲリラ豪雨のような局地的大雨に襲われた。しかし、1度だけスコールが降った後に二重にかかった虹を見ることができたので良い経験になった。

1-2. 山岳民族村落訪問について

首長族の存在で知られているカレン族をはじめとする複数の山岳民が暮らす村落であった。そこでは、ほとんどの山岳民は高床式の住居で暮らしていて、観光客向けにアクセサリーや小物などを販売していた。しかし、この村落は観光目的に意図的に作られたところであって、ここに住む山岳民は元々住んでいた村落から強制移住させられたという事実を知って驚いた。

1-3. チップ制度について

スタディツアー中にチップを渡す場面が何度かあった。その多くはマッサージ店の店員に対してであり、1度だけ飲食店のお手洗いで勝手に肩をマッサージされチップを強要されたということもあった。このチップ制度は、自分の中で線引きが難しいと思っている。なぜなら、マッサージ店員にはチップを渡すのに他のサービス（トゥクトゥクの運転手、レストランなど）には渡していないからである。普段暮らす日本には、基本的にチップ制度がないためその線引きが難しいとともに疑問が生じる。

北村宗一

2-1. 花売りの子ども

食事の際に子どもが花を売りに歩いていた場面が衝撃的だった。日本では一部の子を除き現代では労働してはいけない。その環境が当たり前で育った私にとっては考えさせられた。私は、そうやって私のテーブルに来た子どもに対して冷たくあしらうような対応をした。私があの子どもたちと同じような年齢の時にそのような対応をされたならば、もう怖くて人前には出られないと思った。いくらしめないような花を売って歩かなくてはいけないほど、その少ない収入もタイでは貴重なのだろうか。私もそうだが、あの場面での対応は冷たくあしらうことが正しいのか今でも悩んでいる。きっと、他の参加者も悩んだはずだ。

2-2. 海外の中の日本

チェンマイの生活の中に、日本が入り込んでいた事。コンビニやファストフード店、100円ショップ、CMまで海外のモノ、コトが共存していた。特に、日本の高級化粧品CMを見たときには一種の安心感があった。他には多くの日本車、日本のバイクが走り、ほぼ独占市場で日本人として誇りを感じた。タイでは中韓の観光客より日本人のほうがいい観光客と思われがちだそう。チェンマイの地の日本の浸透度を見ると、我々以外の多くのサラリーマン、観光客、有名人といった様々な人が作り上げた日本のイメージを崩さぬよう、旅行中自

分に律することが出来た。

2-3. おもてなし感覚

タイと日本では”おもてなし”の概念が違うように思えた。日本で接客をする際には、高級店やコンビニといった価格帯が幅広い店でも、スマートフォンを触らない、雑談をしない、寝ながら店番をしないことは当たり前と考えられているが、タイではそうはいかなかった。安いものを売っている店からタイ国際航空の客室乗務員にいたるまでお構いなしにスマートフォンを触っていて、市場の店番は簡易ベッドで寝ていた。

これは、私の考えだが、急速に経済発展を遂げたタイでは、学力、経済力、道徳といった部分にまだ粗があるのではないだろうか。昔の日本のオリンピック前には日本人のモラルを向上される運動があったそうだ。その歴史から考えられるに、もっとタイの物価、学力、経済力が向上し、貧富の差がなくなれば、道徳も向上するのではないかと感じた。ただ、これは文化の違いであって、我々日本人が考えすぎなのかもしれない。

私は日本とタイ以外の国には行ったことはないが、もしかしたらタイのほうがグローバルで、日本のおもてなしが珍しいのかもしれない。私は、タイ国際航空の接客にはとてもいい印象を受け、そのおもてなしの精神に好感を抱いた。買い物をしたシルバージュエリーの店でも、恐らく店主の家族の子どもが、気だるそうな顔をしながらではあったが、つきっきりでショーケースの鍵を開けてくれ、気になる商品を手にとって見る事が出来た。自分の文化の基準と自分以外の基準ではそのギャップに大きな差があったとしても、文化は三者三様で、その文化を受け入れることが異文化を受け入れることだと学んだ。

竹田泰介

私が印象に残ったことは、ナイトバザールで盲目の方が道の真ん中でお金を集めていたこと、モン族村落を訪問した際に裸足の子どもが写真を撮ることで10パーツを稼いでいたこと、山岳民族村落での民族の方々が、強制的にそこ

に収容されていることの三つだ。

3-1. 障害について

ナイトバザールで盲目の方が、道の真ん中でお金を集めていたことについては、障害を持っている方への寄り添い方を考えなければならなかったと感じた。理由は、日本なら身体的障害がある場合、幼い頃なら特別支援、大人になったら殆どの人が優しく接するのが普通だ。社会的な立場がどうしても弱い立場に立たざるをえなくなってしまう障害を持っている方に対して、もっと寄り添える方法があるのではないかと考えた。

しかし、本人の意思決定によるものかどうか判別できないこともあるので、改めて障害を持っている方への寄り添い方を考えなければならなかったと感じた。他の人たちもとても驚いていて、井川がインドシナ戦争で、このような障害を持ってしまった可能性を教えてくださいました。今後は、この問題を根本的に解決する力がないため、チップを払うようにする。また、教師になった場合、戦争(争い)は何も生み出さなく、悲しいことしか起きないということを今回の具体例を通じて伝える。

3-2. モノの大切さ

モン族村落を訪問した時に、小学生くらいの子どもたちが決して衛生環境が良いとは言えない場所で、写真を撮ってもらった代わりに10パーツを稼いでいたことなどのことから、物のありがたみを再認識した。日本では、子どもがお金を稼ぐことはできない。私が小学生の頃は、勉強と遊びで、その他のことなどあまり考えられなかった。子ども以外にも、村の方々は、とても質素な生活をされていた。そして、人のあたたかさまで感じた。これは今の自分たちと比べて質素な生活をしているからこそ、物のありがたみを感じる事が出来ているからだ。今後は、どんなに経済発達して恵まれた生活をして、物のありがたみや感謝の心は忘れてはならないように心掛けて生活する。

3-3. 強制/自由

民族の方々が強制的に山岳民族村落に収容されていることについて、とても衝撃を受けた。民族の方々の自由はどうなっているのかについて疑問が生じた。しかし、山岳民族村落に実際の民族がいることで、民族をより知ってもらうことができる。よりよく知ってもらうことで、民族の保護に繋がる。この矛盾はどのように解消するべきなのか、またこの矛盾は解消するべきでないのかなど、考えさせられる問題だ。

そこで私が考えたのは、時代の流れについてである。進化により古いものはどうしても人々の記憶から消えやすいものであり、興味を持ちにくいものだ。それは存在意義がないと自然と無くなってしまう。生命、文化、伝統などのへの尊敬は、生きているものだけではなく、亡くなってしまったものにも示さなければならぬ。なぜなら、その生命、文化、伝統があったからこそ、今の私たちがいるからだ。民族という存在は、無形であるが、命と同じように尊敬しなければならない。今後は、この考え方を忘れることなく、この大切さを生徒に理解してもらえような教師になる。

有待亮佑

4-1. サタデーナイトマーケットにて

目が不自由な男性が音楽でお金を稼ぐ姿。また、奨学金を集める少女。日本では見ない光景を目の当たりにした。私は思わず心が打たれた。周りの観光客は、まるで屋台を見てるかのように無視する人が多く世の中は冷たいと感じた。もし、同じ場面にでくわしたらチップをあげたいが、私がチップをあげただけではその人達は救われぬはずだ。また、彼らがサタデーナイトマーケットを楽しんでいる私達に対してどのような感情を抱いているのか予想もつかなかった。

4-2. 山岳民族村落を訪問

家族の故郷を離れ強制的に連れてこられ、その人達の暮らしを観光客に対し

て見せ物にしている事実に対し、怒りや悲しみといった複雑な気持ちが込み上げてきた。実際に訪問してみると、私達観光客が彼らの暮らしを写真とることに対しても抵抗なく受け入れていた。また、笑顔で写真に応じてくれたりと想像とは違い非常に驚いた。ただ生まれた環境が違うだけで、生き方にここまでの格差があっていいのだろうか。

4-3. 友人との再会

1年前に無人島サバイバルで出会った Phu さん。このたまたまの出会いが今回の国際交流に繋がった。自分も含めてそうだが、日本人学生はタイ人学生に対して日本語が聞き取りやすいように話し方を工夫しているように見えた。また、タイ人学生も日本人学生に対してチェンマイの魅力を最大限伝えようと様々なプランを練ってくれていた。

水野花

5-1. 言葉の壁について

タイでは日本語が少ししか通じないためタイ人の方と会話する時は日本人同士のようにはいかず正確に相手に伝えることが難しく感じました。コミュニケーションをとる際にはジェスチャーや表情を大きく表現することを意識的に取り組み、相手に伝わっているかは相手の表情を注意深く見て何度も確認をするようになりました。

タイの方々はとても優しくフレンドリーな方ばかりで関わるのが楽しかったです。普段日本にいる時よりも積極的に話しかけたりお礼を言うことができています。感謝の気持ちは相手に伝えることができたけど、道を聞いたりなにかをたずねる時などに詳しく伝えることも、相手の言葉を理解することもうまくできない時がありもどかしさと言葉の壁を感じました。そんな時自分に英語力がもっとあったらと思いました。しかし、ジェスチャーや表情で相手に言いたいことが伝わったときに言葉が上手く通じなくても自分の力で伝えられたという自信も持つことができました。

5-2. 衛生面について

私が一番衝撃的だったのはカットされたフルーツが売られている屋台を通りかかったときに異臭がしたことです。売り物のはずの商品が腐っていたことに驚きました。

また、トイレに紙がなく清潔でなかったり道にゴミやゴキブリがよく歩いているなど日本ではまずない光景に驚きました。スタディツアー中は衛生面で自分が気をつけれるところは注意するよう心掛けました。タイが衛生的でないわけではなく日本が綺麗すぎなのかなとも思ったし、日本は売り物の品質管理や、道やトイレがきれいなのは誰かが掃除をしてくれていることを身をもって感じることができました。

日本でも、「自分のゴミじゃないから関係ない」ではなく「この場所を気持ちよく使う為」に自分ができる範囲で片づけてから場所を出る癖をつけようと思いました。

5-3. 山岳民族村落を訪問したこと

タイの様々な山岳民族が一つの村に集まっていました。山岳民族村落を訪れる前にあらかじめ山岳民族博物館でそれぞれの山岳民族について先生が説明をしてくださったので少し知識を入れて訪れることができました。注意して見ておきたいものや所を探せたのでより知識が深まりました。村落山岳民族の中でも首長族と呼ばれる方たちはテレビで見たことがあったので実際に会ってお話をするのができて感動しました。

実際に間近でお会いすると私が想像していたよりもずっと首が長く感じました。また首だけではなく足にもリングをつけているという首長族の女性に紹介してもらったブレスレットが、付けてみると形が変化するブレスレットでこんなものが作れるなんて本当にすごいと思いました。彼らの生活の雰囲気や民族ならではの服装やお化粧を間近で見ることができ、実際に訪れて自分の目で見ないとわからないこともたくさん見つけられたのでとても貴重な体験をさせていただきました。

また、その村落はお金を払って彼らの生活を実際に見ることができる観光地で意図的につくられた観光村落であり、人間動物園とも呼ばれていることを知り、複雑な気持ちにもなりました。料金を支払って見る側の私たち、見られる側の山岳民族の方たち、同じ人間なのに区別されているように感じたからです。そしてそこに住んでいる山岳民族の方たちはどんな心境なのだろうかと思いました。

岡部すみれ

6-1. 働く子供たち

1日目-1に記した内容について、小さな子供達が物乞いやお花やお菓子などを売って行商していたことだ。他の人たちもわたしも断ってしまったが、生活する為に働いている彼らを見て日本との生活の差を感じてしまった。もう一度彼らに会うことがあったら、可哀想だと思うのであればお金を払ってあげたい。

補足1日目-1の内容

スタディツアー初日は、ほぼ移動で1日が終わってしまった。印象深い出来事は、ナイトバザールでみんなで夕食を食べた際、ご飯を食べているところに子供達がお花等を売って回り、物乞い、行商してお金を稼いでいたことだ。日本では見られない光景で、小さな子供がお金を稼いでいると考えると日本との生活の違いを感じた。鈴木先生の話によると、いらないのであればそこではっきりと断ってあげたほうがいいとのことで、他のテーブルに座っていた外国人も首を振り断っていた。私達も断ってしまったが、もしあの時先生がいなければ、きっと訳もわからずお花を受け取っていたのではないかと、また、こんな小さな子供が働いているなんて可哀想と思いお金を払っていたかもしれないと思った。タイの経済格差をここで実際に直視することができた。もう一度同じことが起きたら、自分がお金をあげたいと思うのであればあげて、要らないのであればきっぱりと断りたい。

6-2. 民族観光村

4日目-1に記した内容について、モン族村落（BAAN TONG LUANG）を訪問したことがとても印象深い。モン族村落に住んでいた人々は、物を売り、500 バーツを払って自分たちを見に来る観光客をどのような気持ちで見ていたのか、とても気になった。わたしはもう一度行く機会があったとしても複雑な感情になってしまうのでもう行きたいとは思わない。訪れた際、初めて見る民族にとっても興奮していた。しかし、彼らは強制的にあの場所に住まわされ、安い賃金をもらい、観光客達のためにそのような生活をさせているタイ王国に対して言葉では言い表せない感情を抱いた。

補足 4日目-1の内容

スタディツアー 4日目は、車を一台借りてチェンマイ大学に行き食堂で昼食を食べた。チェンマイ大学は本当に敷地が広くて、学内を移動するためのスクールバスのようなものが何台も走っていて、その光景を見て広さを実感し驚いた。その後山岳民族博物館（HIGHLANDPEOPLE DISCOVERY MUSEUM）と山地民族の観光村落（BAAN TONG LUANG）を訪問し、夜はチェンマイの学生達と郊外にある Shabu Buffet というお店でみんなで夜ご飯を食べ、TAWANDANG Chiangmai というお店で歌やダンスを見て楽しんだ。その後ホテル近くのマッサージ屋でタイ式マッサージを施術後にしてもらった。一番印象深いのは、モン族村落を訪問した際に見た光景だ。いわゆる人間動物園と呼ばれる場所で、様々な民族が強制的に住まわされ生活している光景を見て、私たちはどのような気持ちで見ればいいのかと考えさせられた。500 バーツを払って中に入り、彼女達と写真を撮るために売っているものを買って、彼女達はそれでお金を稼いで生活をしていると考え、観光客向けに見せ物として暮らしている彼女達は一体どんな気持ちで私達と接しているのか、常に人に見られる生活はストレスが溜まるのではないかと様々な考えが浮かんだ。他の国から来た人達も、記念にと写真をとったり、スタディツアーのメンバー達もお金を払って写真を撮っていた。私自身もお金を払ってモン族村落を訪れ写真を撮っているの

このお金が彼女達の生活費になるのであれば嬉しいという考えもあったが、国が運営しているこの人間動物園とも呼ばれる場所に対して複雑な気持ちになり、またこの場所を訪れたいとは思えなかった。(注) 国営ではありません (鈴木)

6-3. チェンマイ大学

印象深い出来事は、チェンマイ大学での出来事だ。車でチェンマイ大学に向かい、敷地に入ってから、大学があまりにも広くてとても驚いた。また、日本と違って大学生も制服を着ていて、チェンマイの学生達の話によると、日本の大学のように自分で時間割を決めることなど出来ず、ほぼ決められた時間割で月曜日から金曜日まで毎日学校に通っているとのことだ。勉強に対する意識の違いも感じる事ができた。私達は学食でお昼ご飯を食べたが、ただ食べただけで、学生達と話をしたりする機会を作ることができなかった。もしもう一度このような機会があったら、そのときは、実際に学生達とお話をして知識や教養を身につけることができたらいいと思った。

設問2

タイ滞在時、誰（スタディツアー中に会った人びと、スタディツアー参加メンバー、自分を含む）について、どんな新しい発見がありましたか？

井川達貴

・タイの現地の人は、日本人を敬っている傾向にあるのかなと感じた。そう感じた根拠は、まず、マッサージ店の出来事で、入店してからどこかの国と勘違いされているのかはわからないが、はじめは愛想悪くされていたが、こちら側が日本語を話し出し、店員が僕らが日本人であると認識すると、態度が急変し丁寧に振舞ってくれたということがあった。また、屋台の飲食店では僕が日本人だと認識すると「最初のお客さんが日本人（自分）だから値下げするよ」みたいこともあった。このようなことがあり、タイには様々な国籍の観光客がいる中で、日本人は特に敬われているなと感じた。

北村宗一

・現地の友達になった大学生の貪欲により多くの知識を得ようとする姿勢、また自身の夢に向かい一生懸命に頑張る姿勢には驚かされた。彼らは自分の将来の明確なプランがあり、将来の話になると、胸を張って堂々と話していた。現地の日本語を学ぶ大学生は、その多くが通訳などの日本語を使う仕事を夢にしていた。彼らは、日本語話者に勇敢に話の輪に加わり、辞書にあるような言葉だけでなく、若者言葉を吸収する姿勢を見せていた。

グローバル社会と言われる現代では、ある一つの言葉が使えるだけでは限界があるように思える。どの言語にしても、少し覚えるだけでも人とのつながりが生まれ、自分の将来がより豊かに華やかになるはずだ。タイ人の友人達からは、言葉の大切さに気付かされた。

私も、普段アルバイトで少し英語を使う機会がある。ごく最低限の英会話能力とスマートフォンの翻訳機能で事足りるだろうとスタディツアー前は思っていた。だが、この旅をきっかけに、翻訳機能を使わずに英会話能力を伸ばしてみたいと考えるようになった。自分の性格上、最初から常にストイックに勉強するとなると、途中で挫折してしまうかもしれない。だが、1日5分からでも、毎日挑戦してみようと誓った。

竹田泰介

・私が発見したのは、英語を話せるタクシー運転手が多いことに驚いた。私は日本で殆どタクシーに乗らないので、日本のタクシー運転手についてはわかりませんが、想像以上に英語を喋れる人が多いので、驚きました。タクシー運転手だけでなく、ホテルのフロントの方、博物館のスタッフの方など、英語を喋ることの出来る人が多くて、驚いた。改めて英語の大切さを痛感した。

有待亮佑

・山岳民族村落で、カヤンの13歳の少女を見たときに、思わず自分が13歳だった当時と比べてしまった。いかに自分が恵まれた環境で育ってきたかを身にし

みて感じた。しかし、ただ感じただけで終わらせてはいけないと思えた。

- ・タイ人学生の勉強に対する向上心

わからない日本語があれば理解するまで聞く。また、タイ語 日本語 英語の3カ国語を話せる学生もいた。今後グローバル社会になっていくにつれ、同世代である彼らはいずれかライバルになる存在。こういった向上心がありレベルの高いライバルは世界にはもっといると思う。ここで感じたことは私へのモチベーションとなった。

水野花

- ・スタディツアー参加メンバーの有待君の人脈の広さとその大切さ

スタディツアー3日目にタイで日本語を学んでいる学生の子たちにチェンマイを案内してもらいました。彼らの中の1人が有待君と友達で、知り合ったきっかけも日本でのイベントだったらしく小さなきっかけで人脈がこんなに広がることに驚きました。

有待君の周りをどんどん巻き込んで小さなきっかけで人脈を広げられる力がすごいと思ったし、私自身も交流する場をもらえて感謝しているしこれを繋げていきたいと思いました。

- ・タイ人の日本語を学んでいる子たちの、学ぶことへの意識の高さ

将来日本語を使ってどんな仕事に就きたいのかの目標がみんな明確で、日本についての質問をたくさんしてくれました。日本が好きだと言ってくれて嬉しかったです。もっと日本について知りたいという学ぶ意欲に溢れていて彼らの意識の高さを同年代ということもあり尊敬しました。

岡部すみれ

・6日間を通して、スタディツアー参加メンバーや自分自身についても気付くことがたくさんあった。スタディツアーメンバーについての発見は1日ごとの振り返りに記した。自分自身については、タイ滞在中、日本にいるときと比べてコミュニケーションをとることができていたという点だ。普段から

あまり人と接することが得意ではない方なので、お店の人との会話を避けてしまったり、自分から話しかけることなど滅多にない。

しかし、私はタイの言葉も読めず話すこともできず、そんな中で生活をするとなると必然的にコミュニケーションをとらなければならない。ジェスチャーや簡単な英語を使っていかに相手に分かりやすく物事を伝えることができるか、自分で考え積極的にお店の人とお話しをしたり、値切ってもらったりと、普段の私にはできなかったことをすることができた。

参考 岡部さんの毎日の記録

1 日目の発見

空港からホテルに移動する際、タクシーを利用したが、事前知識として交通量がとても多いということ、特にバイクに乗る人が日本に比べて多いと聞いていたが、実際に見た光景は、雨が降っているにも関わらずとても交通量が多く、信号が全くないため車やバイクがどんどん割り込みや追い越しをしていた。車線もないので大きな道路ではほぼ一方通行で同じ方向に向かって2～3列の自動車が走っていた。

日本と違って安全性がとても低く、いつ事故が起きてもおかしくない状況で見ていてとてもハラハラした。事前知識と照らし合わせて、学生やお年寄りまで幅広い年代の人がバイクや車を主な交通手段として利用しているということをよく理解することができた。また、多くの車が日本メーカーが生産している車だったので、日本車が海外でも多く利用されているということを改めて知ることができた。

その他、事前知識として、タイの人々はあまり自炊をしないということを知っていたが、実際にナイトマーケットに行って、日本で例えたとお祭りの屋台のようなお店がたくさんあり、食べ物もとても安く、普段から外でご飯を食べる人が多いということも実際に見て感じるすることができた。

ナイトマーケットはほとんどのお店が24:00頃までやっていて、日本のお店はほぼ早く閉まってしまうので時間の感覚が違っていると感じた。また、マッサージ

のお店がたくさんあると事前に聞いていたが、思っていた以上に至る所にタイ式のマッサージ店が並んでいた。金額もとても安いとは聞いていたがどこのお店も大体 200 バーツ前後で、日本では信じられないくらい安い金額だった。今日初めて学んだことは、マッサージ店では、施術後に気持ちとしてチップを渡すということだ。日本にはチップ文化がないのでこのような経験は初めてだった。もし私が個人的な旅行でタイに来ていたら、きっとチップの事など知らなかったので先生達と一緒にタイに来て、このような文化を教えてもらうことができてとてもよかった。

スタディツアー参加メンバーについて新しく発見したことが何点かある。羽田空港に集合する際、生徒達の集合時刻は 8:00 だった。着いたら連絡を入れるようにとあったが、北村くんは集合時刻の 1 時間前に空港に着いたと報告していた。私はこのとき、北村くんは万が一に備えて、時間に余裕を持って行動することができる人なんだと知ることができた。先のことを考え、逆算して時間に余裕をもつことができる人は、とても尊敬する。また、空港で出入国書類を書くとなった際、事前に書類を書いていたのは加藤先生だけで、ペンを用意している人とそうでない人もいて、事前にどれくらい準備をしているかしていないか、気付かされた。これらは一人一人の意識の違いなので、人それぞれ考え方は様々であるが、時間や何事にも余裕を持って行動することができる人は、信頼を得たり何事も失敗が少ないと思う。

タイに着いてから気付いたことは、タイのトイレはトイレットペーパーを流してはいけないということだ。トイレの機能等違う点がいくつかあり、やはり日本と違って技術の違いがあることに気づき驚いた。空港やナイトバザール、夕食後に行った Le Best Thai Massage というマッサージ店で気付いたことは、日本と違ってタイでは仕事がとても緩いということだ。仕事にご飯を食べていたり、ケータイをいじっていたり、お店の外でくつろいでいたり、マッサージ中に仕事仲間とずっとおしゃべりをしていたり、と日本では見られない光景だったのでとても驚いた。ここでは日本とタイで仕事に対する取り組み方や考え方の違いを実際に感じる事ができた。

また、忘れられない出来事が1つある。ホテルに着いた際、私と水野さんの部屋は314号室だった。301、302、303..と順番に部屋が並んでいるのになぜか313号室だけ無く、312の次が314だったので、どうして313はないんだろう？と疑問に思っていた。水野さんは何かあったのかな？怖いねと話していたが私はそれが怖くて、後日水野さんがタイのお友達から聞いた話によると313は数字を並び替えると不吉な意味になるとのことでほとんどのホテルでは313だけ飛ばされているということを知りちゃんと意味があることを知ることができたのでよかった。

→実際には「13」という数字が不吉だと考えられている。「13」を右に45度回転させたとき、タイ語の「ピー（お化けの意味）」という文字に見えるためである。（鈴木が追記）

2日目の発見

チェンマイ国立博物館において、ほとんどの仏像が頭だけ展示されていたので疑問に思ったが鈴木先生のお話によると、仏像はとても大きなものもあり、盗んだ証として頭だけを持ち帰ることが多く、そのため頭だけ見つかって展示されることが多いということだった。実際にいくつかの仏像を見て思ったことは、日本の仏像ととてもよく似ているということだ。また、絵画がとても多く、日本と違う独特な雰囲気があり、どこで書かれたものなのか、この絵画は何を描いたものなのか等、全て説明が書かれていて、翻訳を使いながら知ることができた。絵画が物語のように続いている作品もあり、ゾウが書かれた壁画などもあった。誰が何を思って描いたものなのか、どうしてこの絵を描いたのか、もっと深く調べればとても面白いと思う。

新しく発見できたことは、スタディツアーメンバーの有町くんについてだ。有町くんは、日頃からゼミをまとめてくれたり、行事の企画や幹事をしてくれたりと率先して周りの人を引っ張る力がある。スタディツアー中もみんなでするお金を預かり、ご飯代や交通費を払ってくれたり、ソントウを呼んでくれたりと、とても行動力があり、雨が降り始めると、傘を忘れてしまった私に

気を遣って傘に入れてくれたりと、周りをよく見て行動すること、また気遣いができる人だなと改めて感じる事ができた。また、自分の意見をはっきり相手に伝えることができ、先生が話したことやスタディツアーメンバーがはなしたことも等も常にしっかりと聞いているので、これは有町くんのいいところだと思う。

散策中に気づいたことは、タイでは WeChat Pay や Alipay など QR コード決済できるお店が非常に多いということだ。今日、日本でもキャッシュレス化が進んでいるが、海外からの観光客が多い国ではとても便利な決済方法だと思う。外国人観光客にとっては換金などをする必要もなく、お店側も楽なので様々な場所でもっと利用する場所が増えればいいと思った。また、ジュース等の飲み物の大きさが日本と比べてとても大きいということだ。いたるところにフルーツジュースのお店があったが、どのお店も日本と比べてサイズが大きく、値段は日本よりもとても安かった。移動手段であるソンテウに今日初めて乗ってみて、安全性の低さに驚いた。日本では車に乗る時必ずシートベルトをしないとだめだったり、自動車についての決まりにとてもうるさい。ソンテウは、しかしタイでは、自動車の速度もとても速くてここでも日本との違いを実感することができた。

3日目の発見

ドイステープ寺院（PHRA BOROMMATHAT DOI SUTHEP FOUNDATION）という場所を訪問し、タイならではののお供え物の習慣や方法をチェンマイの学生とに教えてもらい実践することができた。まずはじめに靴を脱ぐことに驚いた。神聖な場所ということで靴を脱ぎみんな裸足で上がっていた。お花とロウソクを持ち、金色の大きなピラミッドのような建物の周りを願い事を心で唱えながら3周し、ロウソクに火をつけて備え花を置くという方法で、寺院でこのようなお供え物の習慣などを教えてもらうことはないの、とてもいい経験をする事ができ勉強になった。おみくじの引き方は、日本と違って礼をしてから引いたりと国によってやはり習慣や文化が違うのでその違いを実際に経験し

知ることができて本当によかった。

今日初めて会ったチェンマイの大学生のプーくん、ロットくん、ティくん、ティーンさん、オモイモさん、ビーさん、彼らは日本語がとても上手だった。高校生から日本語の勉強を始めたと言っていて、毎日日本語の勉強をしているそうで今までどれだけ努力してきたのか、知ることができた。一人一人に目標や将来の夢があり、通訳をする人になりたい、日本で日本料理とタイ料理を提供する飲食店を開きたい、日本で働いてお金持ちになりたい、等明確な目標を持って日々勉強に取り組んでいることを知り、とても尊敬した。彼らは京都教育大学に留学をしたり、これから実習をしに日本に行く予定があったりと、着々と将来の目標に備えて準備をしているのに私はもうすぐ就職活動が始まるというのにも関わらず、何一つやりたいことが見つからずただ学校に来て家に帰りという生活を送っていて、チェンマイの学生のお話を聞いて、私はなぜ学校に通っているのだろうか？と深く考えさせられた。

散策して気付いたことは、タイはスコールなど急な雨が多いという話を聞いたことがあったが、本当に突然雨が降ることが多く、それも短時間で沢山の量の雨が降るのでとても驚いた。夜、サタデーナイトマーケットに行く途中で換金所があり、その目の前に壺のような物が置いてあった。鈴木先生の話によると、通りすがりの人が自由に飲んでいいお水が中に入っているということで、タイに来て、ずっと気付かなかっただけかもしれないが初めて見る事ができた。サタデーナイトマーケットは観光客で人が溢れていた。cooking home というタイレストランに入りご飯を食べたが、そこで食べたマッサマンカレーがとても美味しくて、タイ料理の中で一番好きな料理に出会うことができた。ガパオライスは辛めにしますか？と聞かれたにも関わらず全く辛くなくて、鈴木先生の話によると、外国人向けに辛さを抑えているということだった。チェンマイの学生もお昼ご飯の時に話していたが、タイの人は辛いのが得意だそう。サタデーナイトマーケットからホテルまでトゥクトゥクを使ってみた。初めて乗るトゥクトゥクはソンテウと違ってとてもスピードが速く、シートベルトもないので振り落とされてしまうのではないかと思うほど怖かった。値段交渉を

乗る前にしたが値切ることを忘れてしまい、乗った後に値切れればよかったと後悔した。ソントゥに比べて料金は高かった。

4 日目の発見

新しく学んだことは、首長族に会いたいと日本にいる時からみんなで話をしていたが、今は「首長族」という表現が差別的な言葉にもなり得るという話を鈴木先生から聞いて驚いた。しっかりとその事情を理解して使うのであれば問題ないとのことだが、彼女達の気持ちを一切考えずに簡単に首長族と一括りにして名前を呼んでいたことを後悔した。「首がより長いほうが美しい」という価値観が伝統的にあり首に金属の輪を付けているとは知っていたが、実際に会ってみて、本当に首が長くて驚いた。また、山岳民族博物館での学習を通して、モン族、アカ族、カレン族等それぞれの民族の文化、民族衣装、生活様式を知ることができた。

新しく発見できたことは、スタディツアーメンバーの竹田くんについて、彼はとても美味しそうに食べ物を食べるということだ。初日から何度も一緒に食事をする機会はあったが、竹田くんはほんとうに美味しそうにたくさんご飯を食べるので、その場の雰囲気がとてもいい雰囲気になっていると感じた。好き嫌いせず、たくさん食べる人はとてもいいと思う。私の食事は常に偏りがあって、好きなものと嫌いなものの差が激しいので、好き嫌いせず偏りのない食事をしたいと常日頃から思っているからこそ、食事の面で人が食べているものなどを見て気付くことがあった。

食事をしていて気付いたことがあり、まず初めにチェンマイ大学の食堂でのご飯についてだ。学食ということもあり、どの料理もとても安かった。私はここでもガパオライスを頼んだが、昨夜食べたガパオライスと違って少し辛かった。また、学食内でもお店によってガパオライスの辛さに違いがあり、驚いた。先生から一口もらった牛の血を固めたものは、レバーのような味でとても体に良さそうだった。初めて食べるもので最初は抵抗があったけれど、日本で食べられないようなものを食べることができてよかった。

また、タイ人大学生と夜ご飯にすき焼きを食べた時、卵をといて鍋の中に入れていたので、日本では、すき焼きは溶き卵にお肉を付けて食べるということタイ人に教えてあげたところ、とても驚いていた。タイでは卵が日本と比べて新鮮ではない為、そんな食べ方をしたらお腹を壊してしまう、考えただけで気持ち悪いと言っていた。日本に来た際、ぜひ日本のすき焼きを食べてみたいと言っていた。また、卵豆腐を鍋の中に入れて食べるというのも私はとても驚いた。日本ではたれをかけてそのまま食べることが多いので、やはりどの国にも食べ方や習慣があるので、実際にその違いを体験し実感することができて良かった。また、タイではビールに氷を入れて飲むということを聞いていたが、実際夜行ったお店でみんな氷を入れてビールを飲んでいたので私も飲んでみた。普段あまりビールを飲まない私にとって、そもそもチャーンビールがとても飲みやすかった。氷を入れて飲むのは新鮮で、日本では考えられない飲み方だった。

5 日目の発見

新しく学んだ事は、タイには日本語を話せる人が意外とたくさんいたということだ。ショッピングモールを訪れた際も道に困っていたところ、日本語を話せるタイ人の女性が、「もしかして日本人の方ですか？」と声をかけてくださり、丁寧に道を案内してくれた。私はそこで、日本語が海外でも多く使われているということ、海外で日本に興味を持っている人が多くいるということに気付くことができた。

モン族市場でみんなでお昼を食べるとなった時、最初に入ったお店はインドカレー屋さんだった。私たちはタイ料理のお店だと勘違いして入ってしまい、メニューを見てからそのことに気付いた。そのことを店員に伝え、店員はお水まで出してくれていたのにも関わらず、全然大丈夫だと、加えてオススメのタイ料理のお店の場所まで教えてくれた。私はその時、タイの人の心の暖かさを見に染みて感じることができた。チェンマイの学生やお店の人もそうだが、ほんとうに親切な人ばかりで、言葉がちゃんと通じなくてもコミュニケー

ションをとることができるんだと新しく発見することができた。逆に言えばコミュニケーションが取れば言葉が通じなくてもある程度の事は伝わるという事だ。慣れない英語を使ったり、相手にジェスチャーしたりとスタディツアーのメンバーそれぞれが努力して相手とコミュニケーションを取っている所も間近で見ることができた。

6 日目の発見

飛行機に乗ってチェンマイからバンコクに向かう時、窓から見えた景色がとても綺麗だった。日本と違って、家や建物が綺麗に区画されて並んでいて、同じ大きさの屋根が何列にも並んでいた。また、自然がとても多く、森のような場所や畑が上から見てたくさんあった。

朝、ホテルから空港までソンテウで移動したが、自分の知らないところで鈴木先生がソンテウを手配してくれていたりと、自分の気付かないところで誰かが動いてくれているということに改めて気付かされた。集合時間に集まって、移動するという生活を6日間した中で、まずはじめに6日間の予定を一から考え、飛行機からホテル、移動手段やご飯まで色々と考えてくださった先生方、移動手段のソンテウの手配をし、チェンマイを案内してくれたり、美味しいしゃぶしゃぶのお店を予約してくれたチェンマイの学生、貸切の車を手配してくれた鈴木先生、そしてチェンマイの学生と交流する機会を作ってくれた有待くんと先生方、このような場面が何度もあり、本当に周りの人たちの力がなければ何もできないと改めて気づくことができ、感謝しなければいけないことが本当にたくさんあった。また、北村くんについて、スタディツアー初日と同様、時間に余裕を持って行動していたのはただ一人北村くんだけだった。チェンマイからバンコクに向かう飛行機に乗る前、私は集合時刻にみんなと手荷物検査をすればいいという考えがあり、その結果搭乗時刻ギリギリになってしまった。集合時刻を守り手荷物検査などを済ませ搭乗時刻を待っていた北村くんはやはり、時間に余裕を持って行動することができていた。自分も見習わなければいけないと改めて思った。

設問3

タイ滞在時、誰かが言った言葉や誰かにしてもらったことで忘れられないことは何ですか？

井川達貴

・タイの屋台の店員さんに値引きしてもらったことが印象に残っている。タイ滞在時の多くは屋台での買い物が多かった。その中で、このスタディツアーの課題の一つであった「商品を値切る」ことにチャレンジした。そもそも日本には商品を値切る風習はあまりないため、はじめは値切ることにためらいを感じていたが、屋台のほとんどは値段交渉を聞いてくれて、なおかつ値下げをしてくれたので、値切ることを常に頭に入れながら楽しく買い物をすることができた。

北村宗一

・現地の人々のタイの政権や王室に対するイメージを聞いたことが忘れられない。日本やイギリスでは、天皇家や王族のことを週刊誌、テレビがどのように書こうとも、モラルとしてはともかく法律上禁止されているわけではない。タイは自由な国の印象があったが、現地の人々は決してそうではなく、時に不安を抱えながら生活している事実、とても驚かされた。

有待亮佑

・タイ人の人達の「ありがとう」

タイ語では「コップクン・カップ」か「コップクン・カー」だが、中には私が日本人だと察して「ありがとう」と言ってくれてきた人もいた。たとえ言葉が通じなくても、思いやる感謝の気持ちを相手に伝えることは非常に大切だということを改めて実感した。

・タイ人学生からのサプライズ

5日目の夕方、出会ったタイ人学生が日本人メンバー全員分のお土産を持って

きてくれた。予想もしていなかったまさかの出来事に大きな喜びを感じた。人にやられて嬉しかった事を、次は自分が誰かにしてあげられれば良いと考える。

水野花

・タイ人の日本語を学んでいる子たちがしてくれた私たちへの気遣いです。私たちがタイについてもっと知れるようにいろいろ考えてくれて、現地の子だからこそ知っている人気のレストランや場所を教えてくださいました。

また、日本人の私たちの口に合うように食事の辛さを調節してくれたり、帰る際にホテルまでちゃんと帰れるようにタクシーを手配してくれたりしました。1つ1つの気遣いがありがたかったし、異国の同年代の友人ができて嬉しかったです。

・彼らが日本を訪れる際は今度は私たちが彼らに日本を紹介したいと思いました。他にも道に迷っていると現地の方が遠くからでも声をかけてくれたり、商品を買った後に握手をしてくれたりとても優しい人が多いと感じました。このスタディツアーを通して、たくさんの人に助けってもらったと感じています。私も誰かの助けになったり親切にできるように積極的に動けるようになりたいと思いました。

岡部すみれ

・鈴木先生がおっしゃっていた、「オンリーワンだけでなくナンバーワンも」というお話しがとても忘れられない。これからの社会、仕事をする中でたくさんの人と出会い、様々な経験をすると思う。その中で何事も力がある人が生き残ると思う。その時、たった1人の人材という理由だけでなく、その中でも1番の人材でなければ、これから先、生き残っていくことは難しいというような内容のお話を聞いて、鈴木先生は実際に民族の研究の第一人者としても実績を残しているということがとても尊敬した。また私の仕事に対する考え方が変わった。働けるのであればどこでもいい、言われた仕事をただこなせばいいという気持ちで、特にやりたいこともなくこれからはじまる就職活動を前に不安を抱

いていた。このお話を聞いてわたしは、やりがいがある仕事を見つけ、その仕事で周りの人に必要とされる人材になれるような力を身に付けたいと考えた。

設問4

タイ滞在時よりバージョンアップしている今後の自分のために、あなたは何かをしたいと思いますか？また、それをするためには、今後どのような行動をとる必要があると考えますか？具体的に書いてください。

井川達貴

・もっと勉強に取り組む意識を高めなければならないと思った。そう思った根拠は、スタディツアー中に会ったタイの学生は、大学で日本語を専攻しているということもあり、日本についてすごく興味を持ち、日本について熱心に勉強していると感じた。例えば、僕ら日本人と日本語で会話をしていてわからない単語があったら、すぐさまスマートフォンの検索エンジンを利用しわからない単語の意味や漢字を調べてメモしていた。その現地の学生の行動を見て、自分も見習って何か熱中できるものを探して熱心に勉強をすることが、今後の大学生活や就職活動、そしてその先を考えたときに大事になってくるものだと思う。

北村宗一

・旅行前の私は、マイペースな部分があり、周りの人間を考えず自分だけで行動してしまっていることに気づいた。それは、スタディツアーのグループだけでなく、現地の大学生達にもそのような行動を取ってしまっていた。まだグループ内が初対面で仲良くない時に、積極的に話したり、あえて聞くことに徹したり出来る人にスタディツアーで出会うことが出来た。旅行前の自分ではあのような行動を見てるだけ、受けるだけでやり過ごしていたはずだ。自分の協調性を伸ばすためには、グループ内でも各人の様子をよく観察し、自らがグループを引っ張れるような行動を今後示していきたい。

竹田泰介

・私は、英語をもっと聞き取れるようにしたいと考える。理由は、今回のスタディツアー中に英語で会話する際に自分が思った以上に話すことができた。しかし、聞き取ることが3割くらいしかできなかったからだ。このことから、コミュニケーションは海外でも聞くことが大事だと痛感した。聞き取ることが出来れば、相手の情報をより深く理解することができ、外国人との会話が、よりよい情報交換の場になるからだ。このためにも、今、出来ることは、ユーチューブなどで、英会話を聞く練習をすることだ。また、英会話教室で、更なる実践テクニックを聞くことで、より英語力の発達に繋がるので、実践する。

有待亮佑

・私は今回のスタディツアーで、主に暮らしの格差を実際に見て感じる事ができた。タイ滞在時の私にできたことはチップをあげることだけだったが、これはただ私が彼らに同情しているだけであって彼らの生活は変わらないことを振り返りシートを記入しているうちに気づいた。

しかし、この気づきは私にとってのキッカケである。彼らのために何か少しでも自分にできることはないか、役立てることはないかという気持ちが込み上げてきた。まずは、身近の事から行動を起こそうと「activo」に登録をし、生活困窮世帯の学生向けの学習支援ボランティアをすることを決めた。ただの自己満足かもしれないが、どんな理由であれこの行動は必ず未来への自分の成長に繋がる刺激となるはずだ。一人一人の「ありがとう」を増やしていきたい。

水野花

・今回のスタディツアーを通じて、私はもっとたくさんの人と関わってコミュニケーション力を高めていくべきだと思いました。日本人同士だと自分の気持ちを伝えるのに言葉に頼ってしまっていたましたが、タイでは相手の心情を知るために表情やジェスチャーを注意して見るようにしたし、自分も大きく表現することを意識しました。相手がどんな気持ちで何を求めているのかを日本にい

る時よりも考えることができたので、この癖を日本でもつけていけるよう意識していきたいと思いました。普段初対面の人とは自分から話しかけることが少ないのですが、積極的に話しかけるようにして、そういう相手こそ言葉だけに頼らず相手の反応をしっかり見ていけるようにしたいです。

また今回初めて海外に出てみて、実際に体験してみることが何よりも大切であると改めて思いました。文章や言葉でも知ることはできるけど、実際に体験してみなければ分からないことや、深く理解することはできないと思いました。まずは分からない事をそのままにせずメモを取って後で調べる習慣をつけて知る機会を増やしていきたいと思います。

岡部すみれ

・日本語だけではなく他言語も話せるようになりたい。このスタディツアーを通して、日本語を話せるチェンマイの学生や、タイ語を話せる鈴木先生、英語を話せる加藤先生達を間近で見て、他言語が話せるとより多くの人と会話をするのができたり、言葉が通じるからこそ知ることができる知識などもあり、より自分の視野を広げることができると思った。今更という気持ちもあるが、今後まずは英語の読み書きだけではなく特に話すことができるように勉強に取り組む必要があると考えた。

設問5

タイにおいて、新しく学んだことは何ですか？ もっと知りたいことは何ですか？

井川達貴

・タイで異文化交流をした中で、一番に学んだことはコミュニケーションをとるうえでのジェスチャーの大切さである。僕は、海外渡航経験は一度あるが、そこは日本語がある程度通じるハワイであったため、今回のように日本語がほとんど通じない環境に身を置くのは初めての経験であった。もちろん、タ

イの公用語はタイ語であり、強いて言うならば英語が話せる人が時々いるくらいである。そんな環境で6日間ほとんどの会話を少しばかりの英語力とジェスチャーで乗り切れた。そのため、現地の言葉は話せなくてもジェスチャーというツールをうまく活用すれば、言葉の壁はあっても乗り切れることが分かった。

僕は、今回のチェンマイ・スタディツアーでよりタイについて興味を持ったのでまた来てみたいと思った。次来るときには、コミュニケーションをジェスチャーに頼ることがないように、少しのタイ語と十分な英語力を身に付けてこようと思った。

北村宗一

・今までのタイのイメージは貧しく辛く、日本は豊かな国で幸せという勝手なイメージを持っていた。しかし、それは大きな間違いで、日本人の勝手な価値観で考えた事だった。確かに、タイは日本より貧富の差が激しく、貧しい人々は日本人の何分の一の収入しか得ていないかもしれない。それでも、タイの人々に悲観的な表情をしている者はいなかった。

タイは微笑みの国と呼ばれているが、微笑みだけでなく様々な表情をしていた。その表情はとても温かみがあり、人間らしさに溢れていた。経済的には豊かかもしれない日本人は朝電車の中では疲れたような表情で、チェーン店に行けば作り物のような笑顔で働いている。どちらが幸せなのか分からない状態だ。

私はタイで、ある人が悲観的に捉える状況でも、ポジティブな考えで人生を過ごせば、決してネガティブではなくなるということを学んだ。私は接客のアルバイトをしているが、ロボットのような対応は覚えれば誰でも出来ると思う。しかし、人間味のあるような接客はその人の性格が出る。言い換えれば、オンリーワンの接客になるということだ。オンリーワンの接客は客の記憶に残るはずだ。私は、タイで感じた人間味を忘れることなく、今後の人生に活かしていきたい。

竹田泰介

・今回のスタディーツアーで感じたことは、どれだけ経済発展が進もうとも、何事にも感謝の気持ちを忘れてはならないということだ。当たり前が当たり前なのは大間違いであることを本当に再認識できた。正直、忘れてしまっていた部分もある。なので、今後は、何に対しても、感謝の気持ちを持ち取り組むようにする。今回は、貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。今後に必ず生かします。

・疑問→お菓子の袋はなぜ、日本よりも空気が入っているのか？

例えば、山にお菓子を持っていくと、お菓子の袋はパンパンになる。この理由は、空気が薄くなると、気圧は下がる。気圧が下がると、袋を四方八方から抑える圧が小さくなる。だから、山でお菓子の袋はパンパンに膨れる。チェンマイの標高は300メートルとなる。これだけ標高が高いため、お菓子の袋はパンパンになったと考える。

有待亮佑

・日本のアニメや音楽などが人気だった。本屋に寄った際に日本の漫画がタイ語版で発売されていたり、タイ学生が「ダイヤのA」「NARUTO」「ドラゴンボール」などといったアニメを見ていると答えていた。また音楽に関しては「ONE OK ROCK」「いきものがかり」などを聞くなどと答えており意気投合する場面もあった。

・食文化の違い。食事のほとんどが屋台での外食だった。日本とは違い皆でシェアをしあいながら食事をとった。味付けは日本食とは違い、濃い味やスパイスが効いており普段とはなれない環境だったため、口内炎もできるほどだったが美味しかった。

・基本的に車は左通行だった。これは日本とは変わらないが、一ヶ所だけ右折専用道路が右通行になっている場所があり驚いた。また、日本車も多く特に「TOYOTA」が目立った。日本で言われる外車、高級車などはほとんど見かけ

なかったが、「メルセデス・ベンツ」はちょくちょく見かける場面があった。

- ・日本とは違い、LED 電球などもほとんど使用されていない印象を受けた。
- ・気候においては日本とは異なり、一日に大量の雨が一時的に降りやむといった天気だった。それなのに湿気が高くないせいかジメジメした暑さはあまり感じられなかった。

- ・日本で「夢を叶えるゾウ」というドラマでガネーシャを知るきっかけとなった。ガネーシャはインドだと思っていたがタイでも有名だった。私が購入したガネーシャの置物にデザインされていたネズミが気になり調べた結果、退治された悪魔がガネーシャによって姿を変えられたものという神話があることがわかった。

- ・とにかく観光客が多い印象があった。また日本とは違い、多国籍の人間が営業している場面を見る場面が非常に少なかった。

～もっと知りたいこと～

- ・私は、海の向こうで言語や食事や生きる環境が異なる人々とふれあった中で不思議な感情を抱いた。スタディツアーから帰国した翌日に海に行ってきた。私は海を眺めながら私が見ていた世界観は狭いと感じた。この海の奥には、もっと貧困な国もあれば裕福な国もあるはずだ。まだまだ私の知らないことが広がっているはずだ。もっと知りたいといった向上心が沸いてきた。もっと知ることで見える価値観が変わり、私のとる行動は変化してくると思う。遊びではなく、別の意味で私は大いに世界を楽しみたい。

水野花

- ・今回のスタディツアーを通じて新しく学んだことは人と人とのつながりの大切さです。今回有侍君から人脈が広がったことにより自分自身、周りの人からたくさん得られたことがあったので、小さな繋がりでも大切にしていくなかで身をもって知ることができました。人との繋がりを大切にしていくなかで、積極的に初対面の人とも話すようにしたり、人からの連絡はこまめに返

すなど当たり前のことをできるようにしていきたいです。

また、タイで交流した日本語を大学で学んでいる子はバイトをしたことがないと話していました。そのことから、タイのいわゆる富裕層と呼ばれる人たちの生活と、貧困層の人たちのリアルな生活をどちらも体験してみたいと思いました。どれだけ差があるのか、ただ調べるだけではなく実際に体験することで感じるものや見えるものがあると思うからです。

岡部すみれ

・新たらしく学んだことは、日本との経済格差だ。以前から、タイは物価が安いということは聞いていたが、鈴木先生のお話によると一昔前にくらべてチェンマイの物価は上がったとのことで、タイは先進国ということもあり、着々と日本に追いついてきているということを知ることができた。タイ王国の首都であるバンコクは、観光名所がたくさんあったり、おしゃれなお店があったりとSNSを通して情報を得ていたが、チェンマイも経済発展が進んでいると感じた。ただやはり何事も日本と比べてしまうと、設備の充実さや、交通手段、道路の整備などまだ格差があるように感じてしまった。わたしは、日本とタイの経済格差について、そもそも経済格差がどうして生まれたのかなど、タイの経済状況について深く知識を身につけたい。

以上、五つの設問を取り上げ、それらに対するスタディツアー参加学生による回答を紹介した。多くの学生がホームレスや物乞い、そして観光客の「見世物」となっている山地民に言及していたことが印象的である。日本で生活していたときには気づかなかった日本の魅力（衛生管理の高さなど）に気づくだけでなく、タイ人のやさしさやホスピタリティの高さなどにも驚く様子が見られる。参加学生がそれぞれに異文化を体験し、日本でのこれからの生活上の意気込みが語られており、このスタディツアーが実り多いものであったことがひしひしと伝わってくる。英語をはじめとする外国語学習の大切さを再認識

し、そしてジェスチャーを含めた他者とのコミュニケーション能力の向上を目指そうとする学生が多いことにも気づく。参加学生が本スタディツアーで学んだこと、気づいたことを今後も大切にしながら、より良い未来を切り開いていくことを心から楽しみにしている。

◆引率教員◆

鈴木佑記（政治行政学科教員）・加藤将貴（経済学科教員）

◇参加学生◇

井川達貴（政治行政学科 3 年生）・北村宗一（政治行政学科 3 年生）・竹田泰介（経済学科 3 年生）・有待亮佑（経済学科 3 年生）・水野花（経済学科 3 年生）・岡部すみれ（経済学科 3 年生）